

## 成功もいいけれど、 挫折はなお良し。

### 元プロ陸上選手 為末 大

高校時代は陸上一色の生活でした。陸上部の先生はとにかく楽しむことが一番大事だという考えのもち主で、ことさらに頑張れと言われたことも怒られたこともほとんどありません。もちろん体罰などありませんでした。

そのころからオリンピックのメダリストを目標に掲げ、可能な限り陸上選手として生きていくと決めていました。当時とにかく「世の中に俺という存在を知らしめてやるんだ」という気持ちが強かった。それくらいめり込まないといけないことがあるので、陸上に出会えてよかったと思います。それは後の人生に大きく影響を及ぼしましたね。

僕はそもそも短距離走の選手だったのですが、高校生のときに一つ下の後輩に初めて負けました。当然ものすごい挫折感を味わいましたが、17歳という早い時期にどれだけ頑張ってもどうにもならないことがあるということを、身をもって思い知ったことがすごくよかった。じゃあ自分を活かす道はどこだと懸命に考えて、ハードルという道を見つけ、世界の舞台まで行けたのですから。

日本では成功するためにはとにかく努力しろという風潮が強いですが、若い世代には自分の道を選ぶことの努力をしてもらいたいですね。そのためには本気で何かに取り組んで、挫折したほうがいい。成功もいいですが、挫折はなおいいと思うのです。

Dai Tamesue

### 為末 大

ためすえ・だい●1978年広島県生まれ。法政大学卒。高校時代に後輩に負けたことを機にハードルに転向。大学以降はコーチをつけず自己流でトレーニングを重ねる。大阪ガスを経て25歳で陸上短距離界初のプロ選手に。世界大会において、トラック種目で日本人初となる2つのメダルを獲得し、3大会連続オリンピックに出場。そのスタイリッシュな姿勢と知性的な発言から「待ハードラー」、「走る哲学者」と呼ばれた。2012年6月に引退。現在は「一般社団法人アスリートソサエティ」代表理事、「為末大学」学長、「ランニングクラブ・CHASKI」代表を務めるなど、多方面で活躍中。『走る哲学』（扶桑社新書）『走りながら考える』（ダイヤモンド社）、『禪とハードル』（サンガ 禅僧・南直哉さんとの共著）など著書多数。近著に『負けを生かす技術』（朝日出版社）。